東遊雜記 自十九 至二十 八

和書門
類
二五三七
號
九七
函
九
架
一二
冊

内閣文庫
和書
類
二五三七
號
一二
冊
九七
函
九
架

内閣文庫
番號 和 25237
冊數 12 (8)
函號 177 1162

国立公文書館
National Archives of Japan

東遊雜記巻之十九

備中　古河辰著

八月廿日朝の前より日和とかはり暴風となり
夕べ　西風海の面荒
浪東の間の便若干ふりて西巡見使と初免
おのゝくよろこび殺生のうはさもいとかし
き夕べ帰宿中別源院のうしろ人家より一丁ばか
り

蛎崎河東

なかめ
ひろう波のうふきをすまし
ら、かをうしの実初号は浦浪

明治十年謄写

東遊雜記　八

東游雜記卷之十九　備中　古河辰著

八月廿日朝の前より日和となりし
ゆへ　西渡海の西国巡見使を初め
西廻の便者乘りしふよりを西巡見使を初め
物のくよりうしろ殿のうしろ殿いそがし
き中に滯留中別懇の人々より一ぱい飲く
の儀別なりし事なり　蛎崎河東
稀なるひとり波のうへをまつ
うりかなしき初音や浦浪

明治十年謄寫

古松軒

磯の方に渡る

仙人一貫

知むとて甲斐も浦の雪うきし

和歌の浦渡る

所巡見使に帆帆初めれて津軽より北を

かすひまして松前へ戻りて見送り私彼是数

百級の所地走私海上を木の葉をちらせしめ

陸まで物見に出しまた続かきりもなく張しき

事なりし所出立其時戦きに松前より送りし

人々に見せしかいつまも笑ひをぬくみしに

となるも

貴れ神々立いかに遠ぬ風

ひとのあうめに物ぬくくく

松前より三馬屋までの渡海を西風を北風と

て汐行に隔みて渡る也へに三馬屋より松前へ

渡海をるまりをかし岩に子和の亀先に出く汐

行をえしに海底に数丈の岩石あるひ立し別あ

りと思られ岩へ流きたやき汐の行通りて海

上へ登りとて二鼎の足くらめく海底吹出せ
る潮一丈八尺なりて汐とはとの戦ひまた
海上を一面ふくりとうち沼のまゝ事ゆく
みるゝ波よりもき人を目くるめきて足もあて
ゝ波しく船のうへ小竹のうさとなり此りを
船も平鍋まとも漕付る後ろなりしふやうを
後より風よりくなりくやうく数の四ツ比三馬
屋浦へ着船せし事あり廿一日日和のしく吐浦
小浮留し廿二日発足せしふ彼毎衣月濱より駕
籠を止免ひうく西三郎を初として皆く岩らど

と金剛玉を拾ひしよりうく宝山の玉を称して
中昔あるハ数多ありしかも奇みるもよみし
ゆよ吐濱より紀やとくの名ひしふよりて

古杉新

乙細もたくうやまやらめ和ゝらの小枝
玉よる浦のなるみのよるくて
色ようの名を初より紅もかくあるあ
和めの紀し色ゆへ小油川を暑し伝るの形を
波経濱ハ杉赤浦くよう大ひる岩を民家のてひ
負しく人間もひうく

八月廿三日吉森ハ此宿を出とらうい徒書まも
紀ノ津港第一の津濱まして市中三ヶ所繁昌の
地と称れを以称の所まもの所もむうしハ
あうしかハ今ハ中うくの新井まて古うも家居も
又若狭松前の地ハ嫁入指浦箱館浦よりそれ
も繁昌の論あしむうう年ハ過大地震まて
一家も残りあく民家清き死亡の人かきり形く
わつゝき出年まて仇沼まひ数多の死人有し
かるかくのめしと業用の若ひしまり此所ハ
若和多の社と称る社場所巡見所なり此事跡ハ

事跡ハ奇まもまみ書ふかうハしあるひを徒又
浮説理とふ似りて世まさる跡あるまを土民の云
伝ふ事もあく若和多ハいうあふ物と古しへより
和る人も形く社を中うく方一間半の薬相の小
社まて社家別当の家まも云ひ伝ひしあとまら
ふなし若和多の宮ハ藝州厳島の明神を昔時此
地へ勧請せしと云のこの事れう傍ふ宗像明神
と云社ハ芦を所領を津軽侯の所建立の社中
いふのこまて薬相の事まて名ふ必しとを大ち
うひのこまて伝なり百姓一元まを不及と世まを云し

加い家事の数多ありて之を各知る能はず況
んや之を事ならう和奇者流好事家の説を
を特るなき論あり之事を考へ書をつくるべ
き事也

よみ人不知

うちのくれそめの
濱なる海士の
暗あるあり
うらみ申そめ

百廉らしき事伝へのうけとて余後せるを今の
世の風俗すべて偽りのしとゝみも日本流なり皆
知る社宮の神主行をさゝぬい修義ものらし
と笑ふ人もなきもとゝもさゝぬまゝ敬しうゐへ
しらちのくに地形の深なる峰多く形る奥い
うちゝ安深とよみし外濱まても日如度き御代
形りと世を祝せしよみ奇なるへし峰多き北海
むつうし人見る出し古人子と皆村表を南も峰
多く物語せしを竹形る峰多と称せ系多い
鵜の事といへし事なるうちゝ角きゝ系なりうを書

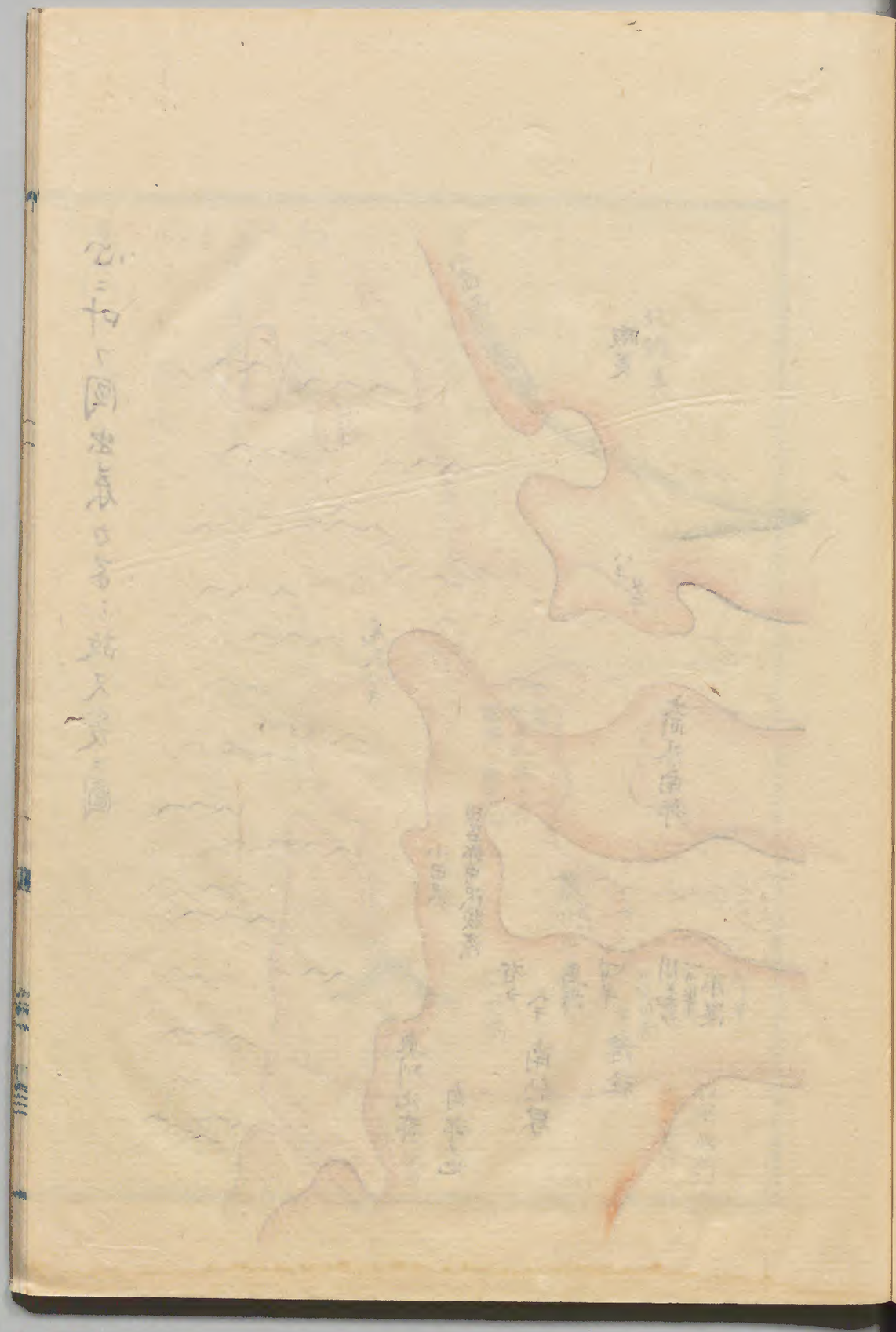
衆ず東の里に聖円村と云ふる津浦矣関所あ
りて往来の人を改此所に城ありと大杵多の神社
と称して所巡見所なり田村丸の開基といへ加
たりに貴船明神の社も所を云ひ俗へ義経公
姫夷渡海の前参詣ありしめ給へとく山
城国鞍馬山の貴船明神祈請ふしき社建置
なひし旧跡と神をもの云ひあり叶ふい弥勝ふ
おりたれ境内なりし
書遺と跡内の宮ふ小坂の説の口と称を此坂
の頂より岩城山とて中の方ふ見へ杉前い矣の

方ともいふる事若年より地理の癖ありて彼此
を生ふの地ふをなし愛ふて方角とる事なり
らも全の吾城ふ生事未熟丁見のとなふ小へら
さるもへふ多へし吾を見るへ強ふ伝を聞ふら
を大祭なるとの多へし
浅虫の所至休居る小此所い青森山地海濱よの
そとて温泉あり三里といへとも大ふ遠しるく
れ鞆湯みく湯つれとあるれ出ふ湯川へ落
く湯宇の立ちの多年燈のとしをべふ津軽の地
ふい温泉なのもふ小して別しを岩城山の麓ふ多

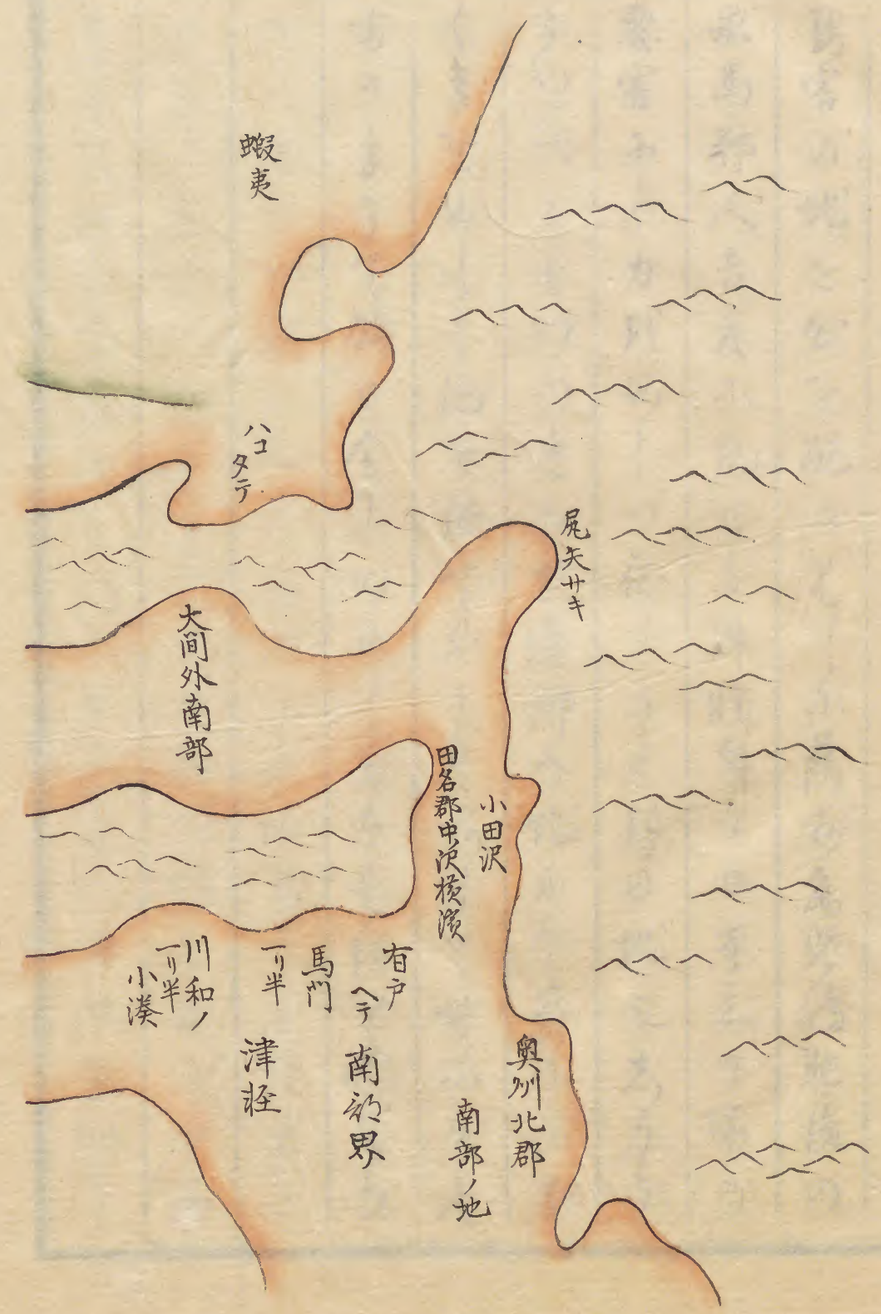
一行きも上方中國筋の一ツ
ら也小濱所上宿此所も津軽領
郡君所藩本城所上所ま大槻の町ま町得小
書所方ま往来の人を設むる南部口の関の番屋
なり刈和野濱より二里余津軽和之郡君の知行
所ま此地ま津軽と称して南部の境の地
むまま予見せる所ふ有る限所ま津軽
中此地理の事以去人ふ此ま一
定しまし此海濱を免ふ所も九十里ま也
ふへきう物を海を乃ふまりまを世地ま

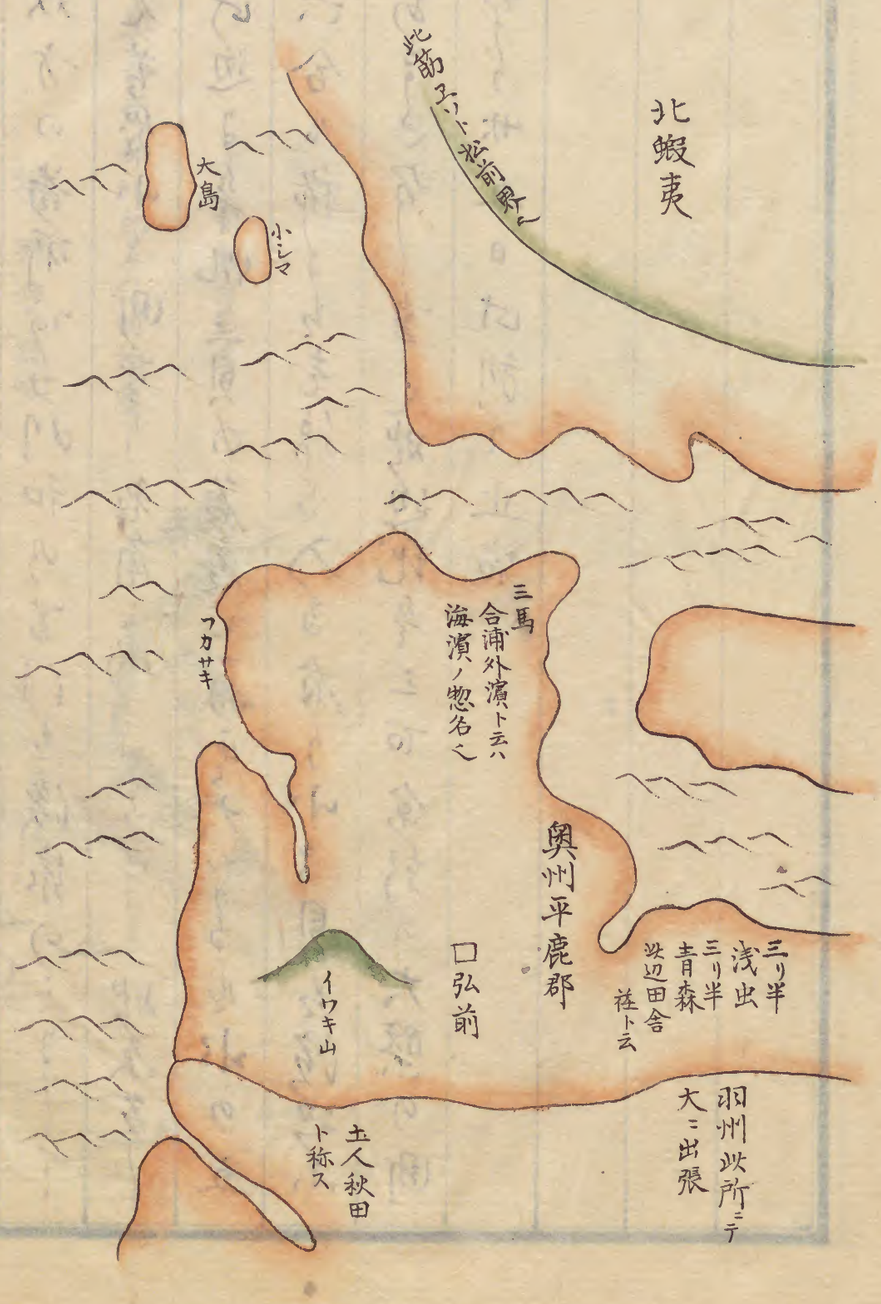
南部此経も奥羽十七八里迄きハ四五里かく
のかく廣方の地ま平庫郡一郡も去人の云
所ハ五十万石の所と云へとも山多く原野廣く
して六十万石も又ハ十七八万石世万
石も有るへし平ハ大槻と云る所ふ小
廣方ある所ふり多害堅固ふ有り羽州
秋田も初めいしく嶮しき矢立峠ま以所
も南部口と称し南方ハ大山連り物を海ま
一ツ濱方狭し此所ま小往道有と云へ共も往
来自由なる往行きの口ま一人横たれハ等

幸所此るの地なり予諸州巡行して要害の地
要害の地を心を配りて考ふ薩州鹿児島肥後の
求馬郡人吉及小記せる津軽なり日本三ケ所の
要害あり力所ありハ所の地之志ろ
ろ〳〵ともいつまも大過郡の地ありて岩ようはよ
く考を出し〳〵他を紙せるよりなり世小考ふ
方のようなる解の含しかなしとも芝紙ふなり



心ニ叶フ図出来カネシ故又爰ニ圖





馬門と野辺地の間小湊駅と南部との界にて
双方の番所にて刈和野通門を渓家のごとくて
足若狭小き町なり急角度にて北東へ
曲り迫る海帆立貝の名産にて大なるを水の五
六合も稀なる事也入る有り小き貝を浦辺に
あまたあり事と野辺地迄三百余町の大際の所
なり此五日此所に止宿

南部津軽界

奥羽南部北郡千引明神圖

坪ノ碑實跡也

石塚せるかの千引明神の社二間三尺檜皮の屋
根ふきそうへ小茅葺きの宮やしろ有りて
の地元中ほどにて手地にて法華の妻おりき
百貫余神ひとり元にて弥勒の所なるを引の妻と称
するかたなる神をを月教寺坊とゝゝ山伏ゝゝが
しく隙地にて古しくゝゝは所巡見所なる山伏
ゝゝ古来の事なと尋ねしに一字不通
の文盲人にて委しかゝは波の家の代ゝ云伝へ
事ゝ神代の時小石の札をたくさん石ゝかきり
み水方の国ゝより海を来る鬼をは追ゝうへせ

内務省

しなるふ恐き鬼の来りて生石玉神流に陪
さしを神〻道の集りさゝし出し殺ひしかるを
石文村より生石を建し所坪村まで来りしを坂
の上田村北東り殺ひ鬼紙殺りなく数し殺ひ所
ふさの石を生用ちて時所紙七天ありて堤免た
まひ生うへ社を建立ありきし事うて生石を
坪村より竜を引ふ人数多人まて引し紙所
ふ引大明神とまなりの奇に

みちのくに千引の石と我高は
荷の人おりふ中や殺ひ事

右の通り教岩坊ヶ口上ゆて掛りさりのまゝ紙
書ちるをなりおりしも竹内巷とも平多の巷
しおりひし事之鬼と称せふ生姫夫人の事な
ふへし神代巷うう奴時まやひうへ文字ひうし
と云事の社僧いなきやと尋しふ恒例文家の有
し紙巷へしおりし事物ふ世ふ称せふ壷の碑ハ
此所ヶ生ふる碑まして宮城郡市川村碑ふハ何
ら代風土紀まも取ヶへせし事まひれハ此而
ふ生の壷の碑何ら事と大迎鄙由へふ紙ともし
を多賀城の門ヶ碑を入いさし古しへ門京紙壷

と云へし所ふ誤りて壺の碑と風土記ふ書給り
しかへ後世ふ初めて いよ〳〵石ちつへしきのな
るへし古奇よりも尊とき考四つへし

顯照法師

四しし敬〳〵ふ稿の奥を清〳〵稿と

姫夫かよハ女碑の石文

西行法師

うちのくさ〳〵奥也〳〵おの風つき

碑の石地矢命北濱の勢

石文也清〳〵ふ記おちよみと学し

元冬壺〳〵の紙ふ記ふ書給り
尊ふの古奇ふ見ぬ
埋き所ふ建置ふ碑壺通ち所第四の者ヶ上し
ハ神代ふ建置ふ碑壺通ち所第四の者ヶ上し
天神七代ふ地中ふ埋ふ石文の土中ふ埋ふ
國へ移り移し時ふ人の人をうつ地中ふ埋
ふし大同二年所社を建立ふ事を云し
なる教岩坊ふ記を同し神代ふ建し石文
のふ人ふ引し地ふ移ふ時も記論ふ其場
ふ者き番しうふ思て古しへの風俗ふ印ふ教

国立公文書館
National Archives of Japan

無しとする論者の所説は以の理論なれ
ども自己説を加へ引用せし事世に多しとす今壷の碑と称し謂る仙台
市川村小田原多賀城の碑とも紀行に初れりとき事なれども志
きりとなを面白く思ひ文はまた増も好き余義
なれども理をいふ事なるべく好事家のなくてかみと
なり捷人の友となる一物なるべし
予東都にて見し図小田原の如きの景不持せし人
なり予案ふるに辺鄙なる小城にも素に

して人の物産を吟味せざるべからざるものなるべし又
古しへの景物を偖へしものなれば古しへの景物
なるべきを解しかたき所あり又人
考へしに日本中央文字漢字いまだ不審説口
をかるべし

奥州南部建
坪碑之圖

天智天皇の六年に当て阿倍比良夫を征夷将軍
として北アワを征し南は流球日本へ隋使せし
め靺鞨の地は日本の界を多川柵多賀城へ如
の蝦夷窟幸れ地三千里の沼ハ皆日本の地とな
る然きい渤海の碑を見るに大祭日本中央ハ
ひらる為り是より北は日本れ地高くありて大
国ハ南りて和國の人ハ小も高くせて国の初めも
小度き事を謂る為ハ立多ハ碑と古くハ素朴
多ハ為ハ文字も簡ハ只四字ハ記し多多ものな
ら是田村麿の時ハ昔天智帝の時ハ高く夷狄ハ

隋代せ多ハ記し多ものを顕照法師神中
抄ハ見へ多り天智帝れ時蝦夷のシリへ四ハ船
守府ハ亦を云ハ其ハの事ハ見る人考多へし
陸辺地より二里余有戸ハ休ハ所ハ渤海の
ミハ多へ内しき家ハ海濱より貝石を産ハ人
も拾ひし事なり毎衣用の舎利石と称せ多ハ玉
を白く地濱より産せ多ハいさつて黄金の色ハ
常て生き色より見事なる而衣用の舎利石ハ
も黄しまき赤豆石青石も多へ多へ貝しき石な
り多ハ也ハ有ハ也ハ多へ世ハ津軽ハ舎利石ハ

て毋衣国濱の名の事も他国にも石好の人と称
する事なりこの有戸濱の石い新しくよりて
初りしかも玉極せし辺鄙なれども世人たちまちに
志うれい奥州にもうつりもなき廣大の國なれば
度々のいさら忠兵衛のいう程濱くしたる奇石美木
あるものの所なるまきかもあらんを野辺地をかの里の
名をしるに村と称せる訳もなきとも村名なりと
事もなく中うに一村をなすを小人家
もあれば事なり千引石新の村なを古しへの事と
思へる也

東遊雑記巻之十九終

東游雑記巻之二十

備中古河辰著

廿六日　右戸ヨリ五里　横濱ハ止宿ハ海濱の少しき
漁家のミなれば廿七日横濱より発足三里　中の沢
三里半　田名部止宿田名部大繁の所なれば此新
の内なれども貴一の所なれば海も少しきなれば
為町なれば川あれども新の為いう為より恐き
山の禁まで二里半余恐き山の事を焼山と記し
て和漢三才図絵なれば不時に焼るゆへ
なり焼山と称せとなり大虚説なり此山を青森

を出ずるかはやく面白さ云ふべからず山とくみすをかうを浦くみて冊山の燃しなれば
見しものもかうやと案内の者いひあはせ
浪人くも尋ねし事なるふ老人のかつてへもも
恐き山の燃しといふ事い所ゆゑ雲雷発ふ
雷ふ至りし所見きい燃りの如くなる中に多
まく来りし旅人の燃りと見て燃といひし事な
るうんも所にいひし事ゑ日本俗の国なるも
生地ゑ立られしを物語りを信じて書ふ者なりと
思ふ大ふ遠ひしものかと思はれもし

此山のこふかりに予備州をめぐり実を正し
見るふ妙と不思議の考説ありいせ所
き行きも仏象神を象りうい出せし虚説ま
を増も多きなる世ゑ奇怪の説を好む人の
ふものかくいろくの物語を加へ少へ見せ思
人の実と云ひく板本ふ形ゑ事なる此
記ゆゑ予ゑ説誤多事も多くへ見る人案
ゑへし記きも妙しふ思議といふ地奇怪の云
所を補んゑ為ふ尋ねく上ゑも自分ゑ所ふ至
見くこしへ事ふれい是迄世ふいく形いせし

よりハ正しかるへしさつきとも富士山の如く
いまへハいまへ今も燃まるやうに此悪き山も
古しへ見るへし筆あるや百年以来も見へしうる
なし中華ハさうき日本まても佛家よりして虚
説をいひ出して愚人をいやるをたへに夫より
して虚説の流行し今日本の風俗となりしなそ
かなしき所業内者の中上には悪き山ハ古へ人
慈覚大師る弁て石佛を建まへしし所りと云
しなる悪き山所巡見所まへ可そ悪き八紀を物語
り紙家に記せるらの案判

郡下文部ニ作
ル未タ是ヲ知ラス

廿八日田名部所発足三里半小田の沢所休ミ此
間ハ廣大なきりもなき紀原野にて大坊なれとも
公領ハ思召まゝりにて中華まて虎のすむ所ハ
宗とかゝる京なれんと評判せし事ミ田名部分
小田沢ミ里半とて人いひし所七里もありてミ
なし寛彼となりし所に業因の為かなりて
いりまのにおりしもかり

鶏楚禮山ニ書焼山ト
云山ハ此山ノ事ニ非
ス九艘泊リ山ヲ称セ
ルト土人ノ物語ナリ

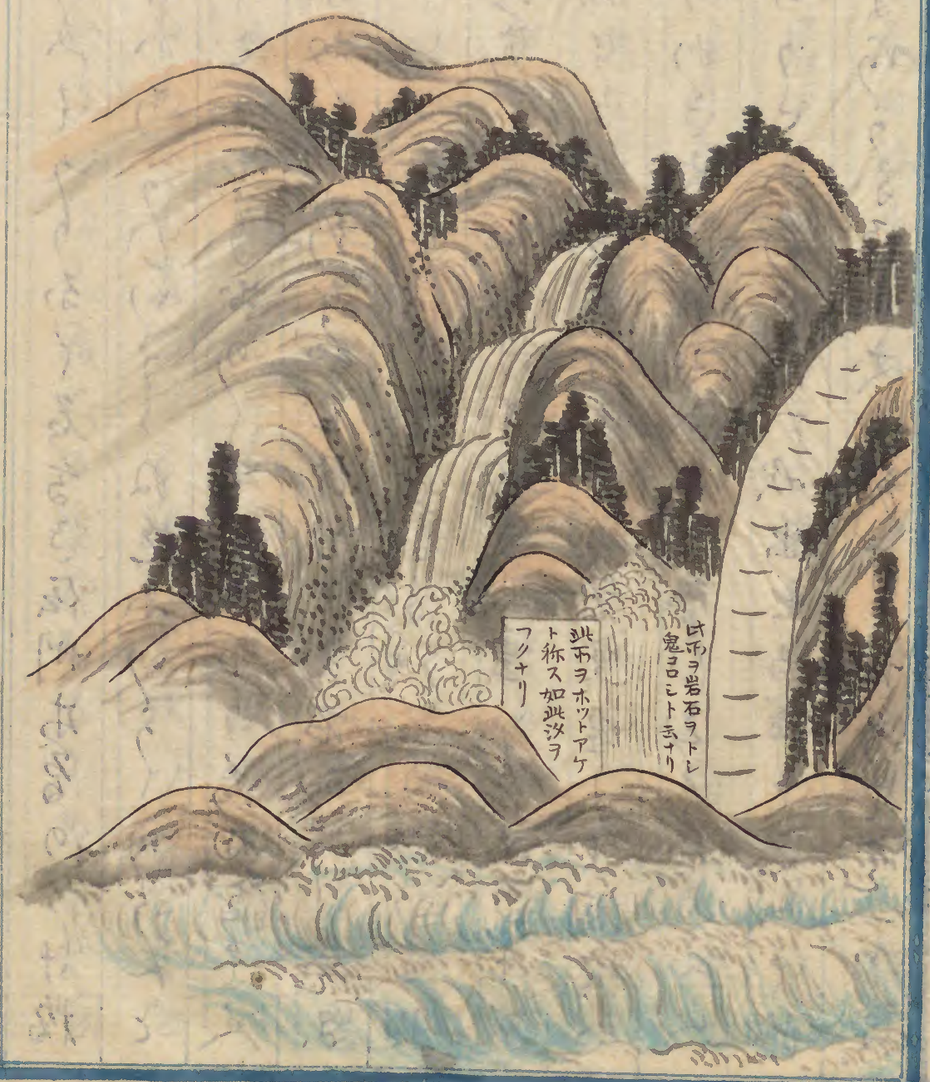
小田の澤より人家ハ海辺東ふうけし浦ふして
やうゝ漁家十三家なりゝ人の住居をもいと
やうなれ家よりあるなかゝくのあとくの物ハ何し
ふ来りし事と所巡見使を初めとして多くあり
きたりし事ゆゑ東の方数万里なる事ゆゑ万国
金銀ゆゑ見れハ是より東の方ふ知るくもなし
かくゝなる地中の世界ゆゑ京師ハ雲中
より打出るかと思ふ山のめき大浪立ての星捨
を次ぎ事なり日本の島ゆゑ此所ふ沿と記せり
是も僅なる沿ゆゑ小沢なるの海ハ二ケ所あり

岡を角さ沼もの沼すいあるこれ小田の沢より海
浦まで三里半浪打きその濱辺をゆうく往来
せるふせる事まで乃と稱を角きまで乃と
此日も風も吹く東海一面ふ明事面方の雷乃ふ
とく大浪馬前ふ立乃のう岩打波の音丈も動丈
と角まで乃とく雨のふる如くふ成上より蔭を
あく夜ふ入さし日本の内とハ思ハれ
をしを運運シヤカタラあとハ思をかくも何
らんと心まきくこを角のもハ乃を歩宿せ
る所くハ今何里何る事乃やと弱ふ角やをかし

もやくいとくんとて心乃をくもとりし道
をいそきし事なり

小田沢ヨリ泊マテノ
海濱カクノコトシ

西



検尺いとまうあく名付き伝州市谷のうけ橋
あとくいちうしいとまうぬ之ふいとゆうんと
案ずることとなりおのく寸まりわり前田をを人
足脊ふおひしく紀なやむ多なり岩石おとし鬼お
沈しといと龍おうをを多る式そうついて上
ようひ笑くふおくておりし事なうホットア
ケト称せる而を浪打きの岩空虚して洞穴へ
沖山のかき大浪打おのるく響い到く徳きのく
ま陸のうくふある宮へ吹出せる事とくく没
の変なりうふ又一丈余所よくりうを之一つる

てを佛人の称しと紀名物なるくきもの之杉前
の沼吹岩と雲理国しまき称京の滝あり岩のか
くれ谷より急流を為る水中まを行前り行陸り
ちりを夫より一流とをりを為る而乙一丈ゆ分り
他国ふな紀瀧ゆへふ行瀧と称せるやと案内の
者ふ晋しふ瀧とりをを之をまを安石の滝なり
芝おの事まを辺鄙まを人も通ハ如而なる式四
ふへし安石の瀧まも世を巡見役所通行の時
を行のとなりとも名つけく瀧の名式いの為きを
瀧とをかり四ないく吾人の貴抑ありるもまき或

きゝし都ちかく此瀧なりい天下の人も称誉を
へき瀧なりかゝる地まで名をへも有し人の世
みなれぬもかくのごとくかなりもものゝ渉辺の用
事さらになき所まで二三里の外よりも来る
所もなくして何の用へみやゐ巡見役を古し
へしもの所の通りもあるやと皆く云
つるやきし事ゆへ人見物出し二三里外のもの
も皆知ひしもの多く絶所なりとて十方かゝる
し伊勢の辛地の海濱ゝ出ぬい年く破船せし
大船の道具木の葉ゝちらせし中に演一両ゝ

ゝ所事まで帆柱或初まで加ゆ若茶碗ゝ動ゝ
まで大浪ゝ打上ゝ又ゝ用もあられをりゝ
し何ゝ数ゝの船乗員をそなはしてかくのゝ
ゝ拾ゝ物ゝ中ゝと名ゝ川孫兵ゝ破船の乗員
動物ゝ船ゝ死せし船人の生家ゝ多ゝ来
あるゝ中ゝ拾ひゝ中ゝ海伊勢
ゝ中ゝ海平風ゝ吹ゝ沖ゝ船ゝ難
船ゝ船荷物をうゝひゝらんと板を脇に
ゝひゝ中ゝ火をゝ中ゝ帆のゝ沖行
船の磯ちかくよりて岩ゝ衝破せゝと

ようなる人の弱虫かと思へり又もしも荷物を奪ひ取る物盗の如きものなりとせば人命の如き重大なる事件の出来ん時迄あとに残る人間は足手におわるいやしき婦人掃うんさしあるべきはずなれども又もあるべきおびただしき数を残し人とは又もあるべきなれども乞食しくらいあるべきまし乞食と男女ともふ千二百カ所ありて十ヵ所しを巡回ありてもし解せざるべきを巡見使ハ所々をよう巡見せんを巡見人ハ三人ハ城下元の万事ハ公儀より出張の御役二人ハ三人ハ城下元の万事ハ公儀より出張の御役

付ケ申事ハ申ハ別ニ南部の地より出張の御役人ハ盛岡城下より通辞の者ハ二人ハ出張ハ此所ハ通辞の者ハ解せざる事の多し事ハ人ハ出張ハ通辞の者ハ事ハ不思議の縁の多しかくの如の地ハ東ス事ハ一度も聞き一度ハ聞き出張ハ出張ハ浦止宿

廿九日 泊浦出立 三里半 尾駮 二里半 沿止宿なり

泊浦と尾駮との間右ハ海辺ハ出ハ聴ハ事ハ月の入ハ山なりとなりしかば御役所の事ハ

しきものの所まやかりんとうの所をたの
き初めりくとせし東海より磯より四丁ほど沖
へ大ひ形なる岩石屏風をたてしごとく四五石数百
並ひ立しかをさまり景かなかりかく沖より絶く
打掛る浪の岩れうなるへ落るかの天海鼠の如
くてつくくこれも警りをかりなりかの時分風
もなくて海上志川う形る天竜なるの浪立ハき
のかれをし浦人の云一日風吹ハ十りも浪かの
らくありて海上志川う形なをしりをいか加
きもなき東海より発りて浪ハ右の如し

名所集小奥の海とあるを奥州東のかたの海六
十六濱をさして名付し事ハ為登井ハ道奇に
尋ねもかりしの心の奥ハ海小
かりしに磯辺を尋ねも形し
ハ奇なるも為ハ四ハ魚しかりハ此義海ハに
奥もこそを見るもなきなりハ此紀行を見る
人者のをくまれる海中ハ魚をれも中く
尋ねもはくしかをしハ為なりしき尾張
とくくハ所ハ中りく十二軒かる村ありハ時和小尾
張の沿と称しく長三十余所横八所をかり狭き

内務省

而も三丁余此所を岩船の海と称し
小舟を泊る者も有り初め岩船の海
水底浅く多く小船つく時潮の内へ大波
寄て打砕く事なり船の者も元と
是より一里程く又沼あり底深の沼と因て名と
いふも砂深ふして水の流急なる故も有て往往
人馬共に堕て稀せる事のなきふして何も皆もあきて
寄て寄士郡と云ふ也我くは七十里程を出役せ
るの百里の印より来りしのといふ事也皆
ふ窟ふ知りの能く皆知せも一里と称せる変よ

ふ〳〵三丁ゐ丁の事と先達て内奏州に有る者
りて六丁ゐ一里とせる事ふ少しふなるべく三十
六丁乃五里十里の間ふて一里といふ六丁ゐ汁
きハまりしふあるふ極まりなりいつへよ
ふ内ひ形ふつを告る事と京都ふて南北の
西岸といへ百姓かりて所持せし也ふ所くふ
く行合せく見しふ然人と多く予ゐて西をとい
つも動ふする北地ふて沼ともなりかさ
くゆりく彼しこふ多く砂多ゐて尋ふく岩ふせ
ふ也へ遠へ所まさなるへ大ふをふる角の

らん

晦日平沼出立 五里 長く沼上り下市川止宿平沼より南壹里大ひなる沼あり小河原の沼といふ東西五里南北三里此沼も狭き所は幾所あり人見此初岸辺立のものも沼の中を裸となりて渡る而て家所巡見後二船を出されて古河上小船にて渡りし事も船といふも船二艘あり乗出されん南北廣十万石の所家にて所絶之後人も数人居しかども此海にまたる船の少き也自由あるは海の深きにも浅船もなし何も

の沼にても海へ注ぐきし沼なり是より北へ約八小佛の沼とも称す方三十七八丁程東小沼と沼との間を通行せり此時に砂地にて水晶砂多し色白く光沢よく玉格ひ物宿せり和漢三才図絵に尾張の牧花牧の牧あり記し毎年数万疋の駒出る事なれども いつの頃へ絶せしか事なり今まで牧ハなし 白く色白く光沢よく東牧十四里の内にきを開田せし五十万石も有為き人を評判せし行の 虞き聴来れる

陸奥の内ハ牧多ゆゑ
それをとりまとめ
きくに奥羽民家一軒ハ三疋五疋ツヽ馬代用ハ
くゆをうませ年貢ハ
まて南部侯の所領ハ別して弱紙出せる事で
うりなわいまへ
ゆ絵ハのゆひい人国記或ハ日本全図なとを地理
の事ハ知らぬハ
とそ弟ハ奥羽せ奥羽の二州ハ別して
て大地ひきくなりうれ所別まれ地名も

書語り山のゆ所もそうちつく沿あるの事ハな
ゆくまるまゆ事ハ異のゆ所ハ耳あるを切ハ
ゆ数の調ハ事ハれとも異も耳もあき所多し
予思ハ奥羽の二州ハ畿外ハ廣大なるゆハ
右のゆくいさしうさもなきあると見ハ多予
三ゆ絵人出記の地理を考ハ笑ハとくゆも
時度予ハ図紙見る人の世間の地理ハ
らハ予ハまく笑ハ奥
九月朔日下市川出立 六里 飯倉 三里余 三戸止宿
市川をゆ三十軒ハ此辺ゆ

八町しかい人物もよくなり西千軒三十軒の村里も所々あるべしなり市川より　二里廿八丁　八戸
南部四郎殿の所生所まで市中七八百軒大繁
なるよき所にて二万石の内分にて二万石の内分なれども数万
石の所分にて所領を役人も出し人々も所役
人百の多能まも制度ありて是々混雑もせず
所領家南部殿よりも万事のきちんと備きし拵
ふ思られ侍るなり
市川の所宿の事を所侍前の所吉まで所作を所
役人より行程の内改るなり二里廿八丁と云也

きもの人高き迄きて食事もきとしつゝひら
つく出立せり到ふ常和ふ高くして三十六丁道
まして六里余七里も所々ひゝ小高原なりて
人々大ふこと多り後まも安行せふ者を公渡して
行ふやゝ安行なりかゝしとしても三者多へ
き所も形く立板して常四者の者れ高多中ふ
呵りのゝ高る船おりしくもあるあるもの
ふ事もなるざりし程ふ屋せし事なりしかし
きまくせしこ枝若を到く馬好まく数多の馬
を内境ありて所常内の者へ内導すい牧の馬れ

聖京まで召捕せし時分人々も行く育る事
や生徒まで召捕しに川やとろうしに業間の者れ
皆ゝ出奔の者ハ京の門外にて召捕るを度せるとい
う小倉里ゝ迄ハ京の門外にて召捕るを度せるとい
う又門番あ
佐藤あるに奔の事も不審といふ三枝君おし
ゆ怒りれ所新まで言をさしのひなきハ何を云
ものゝと所為ありしういをんしに不ゝとゝ此
時分暇服ありしくゝ大百藤ものゝ
西京ゝ返きて御の者を出を通ゝとて大ひ
呵りしゝハ試者忍入し新まで何中ゝ時中より

元出しに元れハ所巡見使より所寺の所ゝ所言ゝ
中上る覚書まで元御ゝ試御の事を所たつる
ゝ所ゝ所ゝ所ゝ所ゝ所ゝ所ゝ所ゝ所ゝ
ゝ滅ゝ所ゝ書付ゝ試書付ゝ馬の一件ゝ
事ゝ所ゝ事ゝ所ゝ事ゝ所ゝ事ゝ所ゝ大ゝ
ゝ所ゝ所ゝ所ゝ所ゝ所ゝ所ゝ所ゝ所ゝ人
ゝ話ゝ所ゝ所ゝ所ゝ所ゝ所ゝ所ゝ所ゝ
ゝ所ゝ所ゝ所ゝ所ゝ所ゝ所ゝ所ゝ所ゝ
何ゝ所ゝ所ゝ所ゝ所ゝ所ゝ所ゝ所ゝ所ゝ
食事ゝ所ゝ所ゝ所ゝ所ゝ所ゝ所ゝ所ゝ所ゝ

のこりなく何ふるも風情せる事多りしなり
市川二里南ハ八ノ戸川流ル長サ百八十余間
此古橋かゝる所元よりしゝを八ノ戸十七丁八ノ戸
より一里半西南ハ八幡村とゝかあり此所ハ古
跡の八幡宮社社堂あり千三拾九石所領を南部
氏より寄附ありし社よ宝物多しなり右
の内ハ新羅三郎義光公の甲冑ゝ恵金の鎧物
なりしなりもかゝやくばかりなり有り世
ゝ伝ふ黄金をかゝれしゝ入ゝ櫃を置き事なり
なりしゝ黄金の沢山なる事ハ

しゝかゝる甲冑を制せし事ありしと人ゝ目此
驚りせし事なり平考へ見ル戦場ゝも石ゝ
甲冑とハさらに思ハれも出陣かゝ陣まゝハ赤
絹ゝ此節を着ゝ流義の甲冑なりしゝ此甲
冑を着ゝなる豆見ゝも大将とゝくまれハ
きゝなれハ智将なるの陣中ハ着ゝなるハ
なるふゝ勝ゝ勝ゝ此ハ黄金のゝハ制せし
甲冑を事を聞なるなる事ゝ和ゝ三里やゝ
しゝ甲冑なゝ古刀も多ゝ貸りも念のゝしゝ
しらゝなゝ宝物の数ゝ高価のゝ

内務省

汁り掘ひし所ハ江戸を出しより此八幡宮の宮
拍子一すゝ世界めつらしきものを一見せしる
なり

東海新紀堂之丞

明治十年一月

山口透

宮田近義

内務省

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan